2020年1月5日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所 降誕後第二主日礼拝　　NO.1101
聖　　書　　イザヤ書 40:1~2／ルカによる福音書 2:28~34
説　　教　　『 柔らかく見、柔らかく聞く 』

新しい年を迎えたので、あの時代のエルサレム神殿に詣でてみようか。おっ、グッドタイミング。ヨセフとマリアが幼子イエスを連れて来ているではないか(ﾙｶ 2:22)、そこには相当高齢なシメオン爺さんがいて(2:26)、少し離れた所にはさらに年老いたアンナ婆さんがいる(2:36)。
眺めると、幼子とお爺さんお婆さんの組み合わせは、昔ばなしのようだ。どんなやりとりをしているのか近づいてみよう。

両親は幼子イエスを、聖別するために(2:23)神殿へ連れて来た(2:27)。その一方で、老シメオンは救いを待ち望む預言者として(2:25)、幼子イエスを抱えて神を讃えた(2:28~32)。
降誕に際して不可思議な出来事をいろいろ体験した父と母だが、預言者のこの特別な聖別には改めて驚かされた(2:33)。

耳を澄ませて、シメオンの言葉を聞こう。「(a)主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。(b)わたしはこの目であなたの救いを見たからです。(c)これは万人のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです(2:29~32)」。
詩の形式で語られた預言。内容はざっと「(a)己が使命の成就」、「(b)その理由」、「(c)預言」に分けられよう。
シメオンは「正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰めるのを待ち望み、聖霊がとどまっていた(2:25)。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた(2:26)」。生の最後の最後まで、待ちに待って待ち続けて幼子のメシアに出会い、己が使命を全うした。
女預言者アンナ(2:36)も同様(2:37~38)。これは、私たちにおいても然りではないか。

「慰めよ、わたしの民を慰めよと、あなたたちの神は言われる(ｲｻﾞﾔ 40:1)」。「慰め」は、神の民イスラエルに対するものらしい。シメオンもそういうつもりで待っていた(ﾙｶ 2:25)。ところが聖霊は、「万人のための救い(2:31)」として語らせた。それも神の民よりも先に「異邦人を照らす啓示の光(2:32)」と語らせている。聖霊はシメオンを、生涯の最後にしてなおも、人間存在の根源へと深めさせる。
聖霊の働きは不可欠だが、その働きを柔軟に受け取るシメオンも立派だ。信仰的な生き方は、老いていっそう柔らかな感覚を育てる。だから、貧しい庶民の幼子と出会った途端「この目であなたの救いを見た(2:30)」と直感できた。
言葉や徴が現れる以前の幼子に救いを見、また自分が救われていると感じている。私たちも歳を重ねていくことで、こうした柔らかで信仰的な感覚を身につけたい。

「エルサレムの心(民)に語りかけ、彼女(民)に呼びかけよ。苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを、主の御手から受けた、と(ｲｻﾞﾔ 40:2)」。恵みと報いは私たちの罪や咎に「倍する」。
「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められている(ﾙｶ 2:34)」とシメオンは語った。
イエスの十字架によって人間の罪、咎、不信仰が露わにされる。だがそれに「倍する」恵みと救いを受け取ることになろう。キリスト者とは端的に、己が罪を認めそれに倍する恵みを自覚している者たち。敬虔ぶって罪や汚れを覆ってはならない。人間は欺けても、神の眼こそを静かに感じてほしい。

シメオンという名は「聞く」の謂だが、ひと目で救いを捉えた(2:30)。心の眼、心の耳は柔らかく。

★

≪おまけのひとこと≫
年老いて白濁しているがシメオンの眼は透き通っていた　シメオンの耳は世間話に加われないほど
遠かったが微かな風を聞き分けた　キリストを見通し　聖霊の言葉を聞くだけで　完全じゃないか